体に塗布。そして、ウエットケアをスプレーでシュッ。
このようにして、日ごとの命の再生産がつづいている。
だが、悲しいかな、体重が減り続けている。
退院当時の２０１５年１１月、４７kg。
２０１６年１月、４５kg、
２月、４４kg、
３月、４２kg。
４月、４０kg
この数字を見つめていると何故かしんどくなってくる。
５０肩や更年期障害など無縁に生きてきた人。小柄ながら豊満な肉体の所有者だった人。その人が、いまは、草加煎餅のようにやせ細ってしまった。こけ落ちた両頬。尖った「おがら」のように硬直した両足を見るとキリキリと胸が痛む。
それでも、天はなお生きよと命じている。

3、耐えて生きる

（７２歳の誕生日を迎えた頃）

ほんとうに多くのものを失った。
それでも、まだ、だいじな物が残っている。かって、有田和子の特性を、「いつに変わらぬノーブルな気品、童女のような笑顔、氷をとかす春日のような人柄、そして半生をささえてきた希有のガンバリズム」と、書いたことがある。
いま、業苦の試練の中にあっても、「ノーブルな気品」、と、「希有のガンバリズム」、だけは健在している。闘病のはじめから泣き言一つ聞いたことがない。とかく落ち込みのはげしい高齢者とも思えない精神の強靭。
古いと笑われることを覚悟で言えば、奥州・南部藩主の末裔ー旧姓、南部和子のＤＮＡのせいなのかもしれない。
とはいえ、身体の自由を失ってしまったいま、他人の手を借りることなしに生きることはできない。